The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自然習得者にみられる中間言語的特徴の定着化に関する研究
Author(s)	小田, 佐智子
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61393
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　小田　佐智子　）	
論文題名	自然習得者に見られる中間言語的特徴の定着化に関する研究

論文内容の要旨

本論文は、非母語話者が使用する目標言語母語話者と異なる独自の言語的特徴（本論文中では中間言語的特徴と呼ぶ）の記述を通して、第二言語習得における定着化のメカニズムについて考察するものである。定着化とは、中間言語的特徴が意味伝達の表現方法としてパターン化して中間言語体系に組み込まれ、使用されている状態のことを指す。第二言語習得では、中間言語的特徴は必ず出現するものであり、言語教育では中間言語的特徴の出現を最小限にとどめ、定着化させないように指導が行われている。本論文では、日本語習得を開始して10年程度経過した自然習得者4名を分析の中心に置き、その言語運用から中間言語的特徴の定着化について分析を行った。自然習得者に焦点を当てる理由は、自然習得者の言語運用を記述分析することで、教師などの学習監督者による意識的な言語指導の影響を排除することができ、普遍的な定着化のメカニズムの解明につながると考えるからである。調査は、自然習得者の言語全体のパフォーマンスを解明するために、自然談話を収録する方法を採用した。これによって、文脈内で中間言語的特徴がどのように表れ、使用されているのか、談話レベルでの言語形式が意味するところを明らかにすることができる。さらに自然習得者のデータの比較の対象として、教室学習者の調査も行った。両者のデータを対照させることで、自然習得と教室学習という習得環境の違いがもたらす定着化傾向の異同についても明らかにした。

本論文は全体が3部構成となっており、第Ⅰ部が序論、第Ⅱ部が本論、第Ⅲ部が総括となっている。

第Ⅰ部は序論であり、本論文で用いる術語の定義や分析課題について述べる。第1章では、「中間言語」「中間言語的特徴の定着化・化石化」「自然習得」といった本論文のキーワードとなる術語を定義し、本論文の目的を述べる。第2章では、関連する先行研究を整理し、以下の3点を分析課題に設定した。

①中間言語的特徴の定着化が生じやすい項目はどのようなものか、また、項目間にどのような傾向が認められるのか
②中間言語的特徴の定着化が生じるメカニズムはどのように示されるのか
③言語内／外的要因は中間言語的特徴の定着化にどのように作用しているか

第3章は、調査概要である。主にインフォーマントの情報と調査方法、談話データに関わる情報を示している。

第Ⅱ部は本論であり、中間言語的特徴の定着化の記述を行った。具体的には、第4章では否定表現、第5章では連体修飾表現、第6章では従属節における断定詞、第7章では格助詞の運用に注目し、記述分析を行った。

第4章では、否定表現を対象に分析した。自然習得者に見られた中間言語的特徴の定着化には、五段動詞に一段動詞の活用ルールが適用される活用混同型、動詞やイ形容詞の基本形に「じゃない（ではない）」を付加するもの、イ形容詞「かわいい→かわくない」の語幹の誤認識が認められた。中間言語的特徴は、動詞やイ形容詞のように活用する品詞にのみ認められ、名詞、ナ形容詞には出現しなかった。活用混同型やイ形容詞の語幹の誤認識はそれぞれの活用のパターンの分析が不十分であることが考えられる。以上の点から、否定表現では、複雑な言語処理を回避し、より簡略化した方法で否定表現を作る形態レベルでの定着化が認められた。

第5章では、連体修飾表現を対象に分析した。分析の結果、中間言語的特徴の定着では、「ノ」の脱落、他の助詞による「ノ」の代用、「ノ」の過剰使用が認められた。さらに、自然習得者は、連体修飾表現の使用が教室学習者に比べ少なく、特に動詞による連体修飾節の使用が極めて少ないことも明らかになった。これは、連体修飾表現ではなく、コ系指示詞を用いた情報付加によって、連体修飾表現を回避していること、日本語の連体修飾節はインプットにおいて形式的な手掛かりがないため連体修飾構造の分析が困難なことが背景にあり、結果として連体修飾表現の使用が少なくなったのだと考えられる。このことから、中間言語的特徴に対しても、運用レベルでその形式に意識が向きにくく、定着化したと考えられる。

第6章では、従属節における断定詞「ダ」「ヤ」「デス」に焦点を当てて分析した。中間言語的特徴が出現する従属節は「から」「けど」と、引用節「と思う」であり「おいしいダけど高い」のような断定詞の過剰使用や、「雨φから行かない」のような断定詞の脱落が認められた。「から」「けど」と、引用節「と思う」に中間言語的特徴が認め

られた理由には、主節への従属度が低いこと、〈逆接〉、〈原因理由〉の意味を表す形式として抽出しやすいことが考えられる。また、「と思う」は「言う」や「聞く」とは異なり声のトーンや動作などによって再現性を持った場面を設定し、発話や思考を引用していることを表しにくく、文中に引用部分を取り込まなければならないことが背景として考えられる。定着化の要因として、「だ＋から」「だ＋けど」のようなチャンク的な使用が多いという点が明らかになった。これは、断定詞という具体的な意味を持たない機能語は自然習得者にとって難しいため、意味を表すアイテムとしてチャンクを作ることで複雑な統語処理を簡素化することができるからだと考えられる。

第7章では、格助詞に焦点を当てて分析した。分析の結果、自然習得者の中でも、日本語に接触する機会が限定的であり、媒介語が許容される言語環境にあるインフォーマントと、接触する機会が多く、日本語のみの使用が求められる言語環境にあるインフォーマントとでは格助詞の定着化の程度が異なることがわかった。前者の日本語接触の機会が限定的である自然習得者は、特定の格助詞を過剰般化し、広範囲の用法に用いていることが明らかになった。過剰般化された形式は具体的な意味をマークする役割ではなく、名詞と述語に何らかの格関係があることを示す格関係のマーカーとして使用しており、意味関係は文脈によって補われていることがわかった。このような特定の形式の過剰使用は、規則や用法の分化が不十分であり、精緻化されていない習得初期の段階に見られる特徴であると考えられ、日本語との接触頻度が低い自然習得者の場合、習得初期の中間言語的特徴が定着していることが明らかになった。その一方で、日本語のみの言語環境に身を置いた自然習得者の場合、それぞれの形式が用法に応じて適宜使い分けられており、特定の形式の過剰使用は認められなかった。名詞と述語との関係から形式選択を行わなければならない格助詞は、形式と意味の対応関係が複雑である。そのため、中間言語体系内に取り入れるのには非常に高度な分析及び言語処理を行わなければならない。そこで言語運用における経済性を優先するために、特定の形式をデフォルトとして設定する一種のストラテジーを取り、コミュニケーションを成立させる方法として用いているのだと考えられる。

第Ⅲ部は結論であり、分析結果の考察と今後の研究課題について述べ、本論文で得られた第二言語教育への示唆を述べた。課題①の考察では、(1)形態構造の一部簡略化、(2)意味の優先、(3)意味の希薄化の傾向があり、形態、統語規則だけではなく、形式と意味との対応で簡略化した中間言語的特徴が定着していることが明らかになった。そして、定着化が起こりにくい項目は、否定表現の名詞のように言語処理の手続きが簡単であるもの、L1とL2の統語関係が一致しているもの、「カラ」「マデ」のように意味と形式の対応が一対一の関係に近い特徴がある項目であると指摘できた。

次になぜ課題①の結果が生じたのかという点を、言語処理の観点から考察を行った（課題②の考察に当たる）。定着化は、動詞の活用など言語処理の手続きが多く、負担が大きい項目で、処理手続きが少ない簡略化した規則が定着していることを指摘した。これは、簡略化することで複雑な言語処理の負担を軽減しているからであると考えられる。さらに、文法的正確性を欠いていても意味伝達上支障が生じない場合、意味伝達の効率性を優先するため、中間言語的特徴を使用することで定着化が促される可能性を指摘した。さらに格助詞のように意味と形式の対応が複雑である項目では、特定の形式が持つ意味機能を希薄化させ、広範囲に使用できるデフォルトとして使用することを指摘し、課題②の考察の回答とした。

次に課題③の言語内／外的要因について考察を行った。定着化に最も大きく関わっていると考えられる要因は、目標言語社会との接触頻度とL2によるインターアクションの在り方である。自然習得環境であっても、母語話者とのインターアクションの機会が多く、L2以外の言語使用が許容されない環境では、定着化の程度は低く、インターアクションの機会が限定的であり、L2以外の言語使用が許容される環境では、定着化の度合いが高いことから、日本語でのインターアクションの機会を豊富に得ることで定着化が生じにくくなり、母語話者の言語規則に近づいた言語運用が可能になることを指摘した。

総括の最後に今後の研究の展望と第二言語教育への示唆を述べた。本研究の意義は、日本語をL2とした場合に中間言語的特徴の定着化が生じやすい領域と生じにくい領域の両面から分析を行ったこと、そして言語処理の観点から定着化が生じるメカニズムを明らかにしたことである。また、地域社会で生活する定住外国人の言語の実態を切り取り、掘り下げたことは社会言語学の領域や多文化共生社会の在り方を考えるうえで大きく資すると考えられる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（ 小田　佐智子 ）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	大阪大学　教授	渋谷　勝己
	副 査	大阪大学　教授	青木　直子
	副 査	大阪大学准教授	高木　千恵

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　自然習得者にみられる中間言語的特徴の定着化に関する研究

学位申請者　小田　佐智子

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　渋谷　勝己

副査　大阪大学教授　　青木　直子

副査　大阪大学准教授　高木　千恵

【論文内容の要旨】

本論文は、日本語習得を開始して 10 年ほどが経過した自然習得者４名を対象として、その言語運用における中間言語的特徴の定着化の様相を分析したものである。「第Ⅰ部 序論」、「第Ⅱ部 中間言語的特徴の定着化の記述」、「第Ⅲ部 総括」の３部より構成され、本文Ａ４判 149 頁、400 字詰原稿用紙に換算して約 450 枚の分量である。

「第Ⅰ部 序論」は３章からなる。第１章では本論文で用いる術語の定義を行い、第２章では関連する先行研究を整理しつつ本論文の分析課題を述べる。第３章では調査概要とインフォーマントの情報を示している。

「第Ⅱ部 中間言語的特徴の定着化の記述」では、教室学習者の実態と比較しつつ、中間言語的特徴が観察されやすい、しかもその特徴の異なる４つの言語項目における自然習得者の日本語の使用実態を記述するとともに、中間言語的特徴が定着するメカニズムを考察している。それぞれの項目を個別に取り上げた４章よりなる。

第４章では否定表現を対象に分析を行い、自然習得者に見られる中間言語的特徴には、五段動詞に一段動詞の活用ルールを適用するもの、動詞やイ形容詞の基本形に「じゃない（ではない）」を付加するもの、イ形容詞の語幹を誤って認識したものなどが認められることを明らかにした。いずれも動詞やイ形容詞のように活用する品詞に認められるもので、それぞれの活用のパターンの分析が不十分であることや、複雑な言語処理を回避してより簡略化した方法で否定表現を運用しようとしていることなどがその定着化の要因であるとしている。

第５章は連体修飾表現を分析したもので、「ノ」の脱落、他の助詞による「ノ」の代用、「ノ」の過剰使用などの中間言語的特徴を見出している。使用頻度の面でも、自然習得者にはとくに動詞を述語にもつ連体修飾節の使用が少ないと指摘し、その理由として、日本語の連体修飾節には英語の関係代名詞のように連体修飾節であることをマークする特別な形式がないためにインプットのなかにある連体修飾節の存在に気がつかず、習得されにくいこと、また、知識としては習得していても、連体修飾節の運用にあたってその難易度が高いために回避し、「文＋コ系指示詞」のように分析して表現する方法を採用していること、などの可能性があると指摘している。

第６章は、「カラ」節、「ケド」節および引用の「ト思ウ」節における断定詞「ダ」「ヤ」「デス」の脱落や、その逆の事象である過剰使用に焦点を当てたところで、このような中間言語的特徴が観察される理由を、これらの従属節の主節への従属度や、それぞれの従属節の担う意味・機能の抽出しやすさなどと関連させつつ考察している。また、断定詞についてはチャンク的な使用が多いことも明らかにし、自然習得者にとって断定詞という具体

的な意味を持たない機能語を習得して運用することは難しく、意味を表すアイテムとしてチャンクを作ることで複雑な統語処理を簡素化しているものと考えられると述べている。

第７章では格助詞に焦点を当てて分析し、その使用のありかたが、日本語以外の言語を使用することができる環境にある、日本語に接触する機会が少ない自然習得者と、日本語のみでコミュニケーションを行っている、日本語に接触する機会が多い自然習得者で異なることを明らかにしている。具体的には、前者の日本語と接触する機会が限定的である自然習得者は、後者の日本語のみの言語環境に身を置いた自然習得者と異なって、特定の格助詞を過剰般化し、その格助詞を、名詞と述語に何らかの格関係があるということだけを示すものとして使用して、格助詞が後接した名詞が担う意味役割は文脈に委ねていると指摘している。このような特定の格助詞の過剰使用は規則や用法の分化が不十分である習得初期の段階に見られる特徴であるが、日本語との接触頻度が低い自然習得者の場合、形式と意味の対応関係が複雑な格助詞の体系を析出しきれずに習得初期の中間言語的特徴をそのまま維持し、また運用面においても経済性を優先させて特定の形式を汎用するというストラテジーを採用することによってコミュニケーションを成立させていると議論している。

「第Ⅲ部 総括」の第８章では、以上の記述と分析を整理して中間言語的特徴の定着化をもたらした要因をまとめるとともに、今後の課題をあげている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、日本に居住して 10 年ほどになる、日本語を自然習得した日本語非母語話者を対象として、ほぼ同じ居住歴をもつ教室学習者と比較しつつ、その日本語の運用実態を記述し、またそこに観察される中間言語的な特徴を定着化という観点から分析、考察することを試みたものである。従来の第二言語習得研究は、教室で学習している比較的学習歴の浅い学習者を対象とすることが多く、10 年程度の習得歴をもつ自然習得者が、その 10 年後の時点においてどのような日本語を使用しているのか、また、そこにどのような中間言語的な特徴が観察されるのかを明らかにしようとした研究はほとんど行われてこなかった。それに対して本論文は、研究の空き間となっていた日本語の長期自然習得者を対象に、その日本語の使用実態を４つの特徴的な言語項目についてきめ細かく記述するとともに、その中間言語的特徴の定着状況をつぶさに追究してその定着化をもたらした言語内外の要因を考察した点に大きな意義がある。個々の言語項目の分析においても、従来指摘されてきた中間言語的な特徴が、長期的にはどのような変化を見せるのか／見せないのかを明らかにし、その変化／不変化のメカニズムを考察した点など、評価すべきところが多い。

ただし、問題点がないわけではない。たとえば、自然習得者と教室学習者を単純に２分してしまっているが、連続的に特徴づける必要はなかったか、研究をデザインする段階でもう少し慎重な検討が必要だったと思われる。また、海外で行われている近年の研究で、参照されるべきものが参照されていない場合がある。本論の各言語事象をめぐる記述においても、分析に用いた文法的な枠組みなどに改善の余地が残されているところがあり、考察に当たっても、話者の言語知識／能力と言語運用のいずれを問題にしているのかがあいまいに記載されている箇所が散見された。定着化という通時的なプロセスを十全なかたちで明らかにするには、本研究が採用した、話者の一時点における言語実態を記述、分析するという方法のほかに、縦断的な調査も加えたいところであった。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、日本語の自然習得を開始してから長い時間が経過した習得者の日本語に見られる中間言語的特徴とその定着のメカニズムを解明しようとした本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。